

人権保育専門講座1（三重県委託事業）

障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う

棚田 純子 さん（ちゃいるどネット大阪）

人権保育専門講座1は、ちゃいるどネット大阪理事の棚田純子さんに、「障がい児共生保育 ～大切にしたい視点～ 知り合う・繋がる・響き合う」をテーマに、四日市・名張・津の3会場でご講演いただき、84名の方にご参加いただきました。

棚田さんからは、障がい児共生保育をすすめるうえで大切にしたい視点を、事例を挙げながらお話いただきました。また、グループワークをとおして、参加者一人ひとりが「ともに育ち合う保育」の具体的なイメージを共有しました。



《はじめに》

私は、大阪府豊中市で、長年、障がい児保育にかかわってきました。豊中市は、全国でも2番目に早く障がい児保育基本方針を作成し、40数年間、障がい児保育に取り組んできた歴史があります。今年の2月に、豊中市の小学校で15回目の「インクルーシブ教育(*1)を考えるシンポジウム」が行われました。このシンポジウムのテーマは、昨年神奈川県相模原市で起きた事件でした。被害に遭われた保護者の方は、「この容疑者は、どのように育てられてきたのか？両親に大事にされて育ててきたのなら、私の子どもも、誰よりも大切に育ててきた」と語られていました。そして、「それぞれの違いを尊重して認め合う関係をどう育むかが、これからの課題だろう」と締めくくられました。私は、だからこそ就学前に「違いを尊重して認め合う力や感性をどう育むのか」が問われていると思います。「ともに育ち合う保育」は、0歳児から始まります。0歳児のクラスであっても、周りの仲間と生活することが嬉しいという感性を育てる視点は重要です。保育者が「ほら〇〇ちゃんが見てるよ」「〇〇ちゃんが隣に来てくれたよ」と、日常的に声をかけていくことが「ともに育ち合う保育」につながっていきます。私は、子どもが社会で生きていくうえで、大切にしなければいけないことは「人とともに生きようとする力」だと考えています。そのために、「支援を必要とする子どもの周りにいる子どもたちに、どんな力をつけることが必要か」を真摯に考えていくことが重要です。支援を必要とする子どもと周りの子どもが、人間として本当に対等な関係を築けているかを問うことがスタートです。

(*1)インクルーシブ教育：子どもたち一人ひとりが多様であることを前提に、障がいの有無にかかわらず、だれもが望めば自分に合った配慮を受けながら、地域の通常学級学べることをめざす教育理念と実践プロセス



《支援担当とクラス担任の役割》

◆支援を要する子と周りの子をつなぐために

まず、園としてどんな共生保育をめざすのかを共有することが何よりも大切です。支援を要する子が在籍するクラスだけの問題とするのではなく、園として考えていく必要があります。支援を要するAちゃんを含むクラス運営をすすめるために、クラス担任はどう動き、支援担当はどう動くのか。私自身は、障がいのある子がいれば、自動的に支援担当がつくという考え方は違うと思っています。支援加配が必要かどうかは、子どもの課題や必要な配慮を整理した結果明らかになるものだと思うからです。障がいのある子のなかには、周りの子と一緒にクラス運営が可能な子もいれば、一から周りの子との関係を築くための支援が必要な子もいます。

支援担当の役割は、すべての子どもを横並びにするために、発育発達を促進することではありません。そうではなく、基本的な人との関係を築くための土台づくりのためのフォローや身体面のフォローなど、支援を要する子を含むクラス運営をスムーズにするための役割を担っているのです。つまり、支援を要する子と周りの子をつなぐための役割を担っているのです。こうしたことを、クラス担任と支援担当は共通理解しておくことが重要です。

では、クラス担任はどのような役割を担うのでしょうか？支援を要するAちゃんには支援担当がついているから、Aちゃん以外の子どもたちを見ていけばよいのでしょうか？これは、全く違います。支援担当がいようとまいと、Aちゃんを軸とするクラス運営をすすめていくことがクラス担任の役割です。これは、個別支援計画とクラスの指導計画を連動させていくということです。周りの子どもたちのAちゃんへのかかわり方は、クラス担任の姿勢に大きく影響をうけます。自閉傾向の強い子どもの場合、



一から愛着関係を築く必要があるため、支援担当とAちゃんが個別にかかわる時間も必要です。しかし、そんなときでも、クラス担任が「今、Aちゃんどうしてるかな？」といった言葉を周りの子に投げかけていくことで、周りの子どもたちがAちゃんに関心を持ち続けることにつながります。周りの子どもたちは、担任のAちゃんへのかかわり方、姿勢をよく見ているのです。

◆子ども自身がどうしたいと思っているのかを見守る

みなさんの目の前にいるAちゃんには、どのような配慮が必要でしょうか？配慮には、生活面や人との関係性における配慮など様々な種類があります。私がかかわった子に、言葉は出ないけれども、聞いたことは理解できるという子がいました。聞いたことは理解できるの

で、周りの状況を見て一緒に行動ができていました。私は、実践研修の場でこの子の様子を見て、かかわっていただいている発達心理の先生にも相談のうえ、6月末の段階で支援加配をはずすことにしました。すると、保護者の方がとんでこられて、「まだ言葉が出ていないのに。みんなに追いつくまで人をつけてください」とおっしゃられました。おとなにすべてを代弁してもらうことと、言葉には出ないけれども他の手段を使って自分の思いを伝える力をつけることと、どちらが大切でしょうか、支援について考えさせられた出来事でした。

重要なことは、支援を要する子と周りの子に、どんな力をつけるのかを見極めることです。子どもにつけるべき力によって、クラス担任や支援担当の役割は決まってくるのだと思います。言葉を育てるためには、「やりたい」という意欲を育てる必要があります。その意欲を周りの子どもたちとのかかわりのなかで育てていくことが大切です。集団では、おとながかかわるだけではなく、子どもどうしがかかわるなかでお互いがともに育ちます。常におとなが引っ張っていく保育ではなく、子ども自身がどうしたいと思っているのかを見守ることも保育者の重要な役割です。子ども自身の意欲に沿って保育をすすめていくことで、子どもの心の安定にもつながっていきます。



《子どもどうしの対等とは？》

◆お互いが気持ちを出し合うことで対等な関係を

「対等」ということについて考えられたことはあるでしょうか？簡単に言えば、同じ立ち位置に立っているかということになります。一見すると仲良しで、誰かを排除しているようには見えなくても、注意深く見ていかないとはいけません。気づかないうちに、子どもたちのなかに「僕らと違う子」「赤ちゃんだからしてあげる」といった意識がはびこっていることがあります。これは、Aちゃんにとって人間としての尊厳が傷つけられている状態です。人間として対等の関係とは言えません。そうではなく、お互いが気持ちを出し合ってもよいということに気づいていけるような保育者の声かけ・姿勢が大切です。

まず、「違っていてもいいよ」という感性を子どもたちに育むことが必要となりますが、そのためには、おとなが「違い」を認めていなくてはなりません。「この子って、いつもみんなと違うことするよなあ」という雰囲気はクラスのなかにあるのなら、「違っていてもいいやん。これもAちゃんのやりたいことだから」「でも、Aちゃん、こっちでも楽しいことしてるから来てみない」などと保育者が声をかけていくことが必要です。こうしたやりとりのなかで、支援を要する子と周りの子がつながっていくことが重要なのです。

最初にお話しした豊中市のシンポジウムで、ある障がいのある方が自分の体験談を語ってくれました。その方は、小学生の頃、ノートをとるのをさぼっていて友だちに注意され、「ぼくは、障がい者やからええねん」と答えたそうです。すると、終わりの会で「OOくんは、都合のいい障がい者やと思います」と、たくさんの友だちから言われたそうです。その方は、後日、クラスみんなに泣いて謝ったそうです。そして、「あの時、『障がい者やからしょうがない』と言われていたら、僕の人生は変わっていた。一人の人間として対等に自分のこと

を見てくれる空間で育つことができてありがたかった」とおっしゃっていました。「対等」とは、どんな関係なのかがよくわかるお話でした。この方は、小・中・高と豊中市で育つなかで、「自分の障がいを意識したことはなかった」とおっしゃっていました。インクルーシブ教育がいかに充実していたかがわかります。

◆一人ひとりの段階を見極める

以前、ある場で「対等な関係をめざすために、特別扱いをせずに何もかも同じにします」という声がきかれました。果たしてそうでしょうか？私は、特別扱いは必要ないと思いますが、どの子にも多かれ少なかれ配慮は必要だと考えています。10の配慮が必要な子もいれば、1の配慮が必要な子もいるのです。

友だちとの関係をなかなかつくれず、おとなとの関係ばかりを求める「Cちゃん」という子がいました。この子の課題は、おとなとの愛着や信頼がまだ弱いことでした。おとなとの愛着や信頼を築けていないと、友だちとの関係を築くところまでいかないのです。担任の先生は、友だちとの関係を築かせたいという思いから、Cちゃんが愛着を求めてきても、「友だちと遊びなさい」と返していました。そのため、Cちゃんの愛着欲求は満たされないままでした。そこで、私は、「10分でも15分でも、Cちゃんとの時間をつくってみませんか？」と提案しました。担任の先生は、「えっ、クラスの子どもたちは30人いるのに、Cちゃんだけに時間をとっていいんですか？不公平じゃないですか？」と聞いてきました。この場合、Cちゃんは、人への愛着や信頼を培って友だちとの関係を築く力をつけようとしているのです。Cちゃんは、まだ友だちとの関係を築くというスタートラインに立てていません。同じスタートラインに立つことができるよう支援することで、初めて周りの子どもたちと対等な立場に立てるのです。



◆お互いを知り合う機会をつくり出す

また、保育者は、子どもたちが対等な関係を築くために、周りの子にどんな力をつけるのかを明確にする必要があります。例えば、「Cちゃんを遊びに誘える」「Cちゃんの気持ちを聞こうとする」「Cちゃんとの遊びを面白いと思える」など、到達点をはっきりさせておくことが重要です。みなさんも園・所にいる子どもたちをイメージして、到達点を考えてみてください。対等な関係は、「そこに相手への尊敬があるか」がキーワードとなります。「OOちゃんは言ってもわからないから」と相手を下に見たり、「OOちゃんは赤ちゃんだから」と何から何までやってあげたりする関係は、決して対等とは言えません。子どもたちのなかに、「やってあげる」という意識が見えたとき、保育者は、「やさしいね」ではなく「これは対等な関係とは言えない」ととらえられる感性をもっていたいただきたいと思います。

「なんでAちゃんは、〇〇ができないの？」と聞いてきた子がいたとします。こんな時、「Aちゃんに直接言ってみる？」など、聞いてきた子とAちゃんが直接かかわる機会をつくっていけるように返していくことが重要です。4・5歳児ぐらいだと、「どうしてだと思う？」と聞き返し、どう思っているのかを出させても良いでしょう。大切なことは、周りの子どもたちが直接かかわり合うことで、友だちのことを知る体験をたくさんできるようにすることです。例えば、保育者が「グループのみんながそろわないと、給食は食べないよ」と伝えるだけで、子どもたちはお互いのことをたくさん知る体験ができます。ある園で、自閉傾向と診断され食事が苦手な子がいました。グループがみんなそろって給食を食べることがなかなか実行できないので、周りの子どもたちは困り果てました。担任は、「じゃあ、〇〇ちゃんは何が好きなのか、お母さんに聞いてみようか」と子どもたちに投げかけました。お母さんに聞いてみると、「ハンバーグ」が好きだということがわかったので、給食でハンバーグが出た日に「〇〇ちゃん、ハンバーグだよ」と言って呼びに行きました。でも、その子はみんなのところに来ません。そこで子どもたちは「ハンバーグを持って行って見せたらどうだろう？」と考えます。実際にそうしてみると、その子はみんなのところに来て、一緒に給食を食べることができました。「今日は、〇〇ちゃんと給食食べられるね」と、みんなは心から喜びました。たった一つの約束事を決めただけですが、子どもたちがお互いを知り合っていく機会をつくることができました。

◆周りの子どもたちにつけたい力を明確に

保育者が発想を柔軟にして、子どもたちを見ていくことも大切です。様々な行事の場面では、「一緒に参加すること」だけに価値をおくのではなく、「一緒に走ってはいないけど、目で追って応援しているね」など、柔軟に子どもの姿をとらえて、周りの子どもに伝えていきましょう。Aちゃんのことを周りの子に知らせ続けることが、保育者の重要な役割です。また、本当に対等な関係を築いていくためには、「自分の思いを出せること」も大切です。子どもたちから出てくる言葉を「そういうことは言ってはダメ」と指導するだけでなく、行事や活動、遊びをとおして子どもたちがお互いを知り、対等な関係を築く力をつけていくことが重要です。課題であると感じる子どもの姿があったとき、その場面を取り上げて劇化したり、ペープサート(*2)にしたりして、子どもたちに伝えていくことも有効な手立てです。このように、保育者が活動や遊びのなかで、気になる子どもの姿に立ち止まることができるようになるために、年間指導計画のなかに「周りの子どもたちに、どんなかかわりをする力を身につけさせたいのか」を具体的に明示しておきましょう。そうすることで、保育者もめざす子どもの姿が意識化され、日々の保育につながっていきます。

(*2)ペープサート：紙人形劇。登場人物を描いた紙を表裏2枚張り合わせ、持ち手をつけたものを使う。



障がい児共生保育(「ともに育ち合う保育」)とは？【グループワーク】

グループワークの流れ

🍏 自己紹介



🍏 ワーク 1

「あなたの園の『障がいのあるAちゃん』には、どんな現状がありますか？出し合ってみましょう」



🍏 ワーク 2

「そのAちゃんのことを、クラスの仲間はどのように見て、
どのようにかかわっていますか？」



🍏 ワーク 3

「Aちゃんとクラスの仲間が共に育ち合うための手立てとして、
どんな活動を通して知り合ったり、繋がったり、共感したりが
重ねられると思いますか？話し合ってみましょう」
★現状のなかで、出来ることを探ってみましょう

◆「ともに育ち合う保育」の意義

子どもたちが園・所で一緒に生活することの意義は、将来にわたって地域で一緒に生きる仲間をつくることです。社会に出て仕事に就いた後も、何かにつけて声をかけ合えるような関係を築くことが「ともに育ち合う保育」の目標です。そのために、人との関係をキーワードとした保育をすすめていく必要があります。人との関係を築くためには、障がいがあるかないかにかかわらず、どの子も、必要に応じて他者に助けを求めたり、しんどいことも含めた自分の気持ちを出したりする力が必要となります。「ともに育ち合う保育」を「障がいのあるAちゃんをみんなに追いつかせるための保育」ととらえてしまうと、周りの子どもたちに人との関係を築く力は育めません。Aちゃんと生活することで、周りの子どもたちは、友だちの得意なことも苦手なことも含めた特性を理解し認めていく力を身につけることがで



きます。「ともに育ち合う保育」は、支援を要する子と周りの子のどちらにもねらいをもった、「両輪の保育」なのです。

◆子どもの行動を肯定的にとらえて、広げる

子どもどうしが知り合うための声かけは、意識していないとなかなかできません。日頃から、研修等を通じて、事例を取り上げながらシミュレーションをしておくといよいでしょう。

知り合う機会を豊かにするためには、子どもの行動を肯定的にとらえて、周りの子どもに返していくことが必要です。子どもたちの行動には、必ず意味があります。「暴れる」「大声を出す」「部屋から出ていく」などの行動の裏に、どんな気持ちもが潜んでいるのかを丁寧に見ていくことが大切です。もしかすると、自分を認めようとしなないおとなの姿勢が原因かもしれません。また、ざわざわした環境で落ち着かず、部屋を出ていったのかもしれない。おとなとの愛着関係が築けていないので、動いていないと不安なのかもしれません。自分のことを見てほしいという合図なのかも知れません。障がいの有無にかかわらず、子どもの行動には意味があるのです。行動の意味に気づくことができれば、「それなら、こうしてみよう」と手立てを考えることができます。逆に、行動の意味を探らなければ、手立てを講じることができないので解決に向きません。

言葉だけが気持ちを表すサインでは決してありません。「自分の気持ちを言ってごらん」と迫っても、なかなか子どもは自分の気持ちを話しません。気持ちを言葉にすることは、おとなであっても難しいことなのです。言葉には出していないけれども、表情が物語っていたり、仕草が物語っていたりすることがあります。子どもたちが様々な表現で気持ちを表していることにアンテナを高くしておく必要があります。



障がい児共生保育(「ともに育ち合う保育」)で大切にしたいこと

①両輪の保育

- ・支援を要する子と周りの子のどちらにもねらいをもった保育であること

②子ども一人ひとりを一人の人間として尊重する視点

- ・表情、仕草など非言語の表現を含めて、その子がどうしたいのかを読み取り、その子の視点に立つこと

③Aちゃんと周りの子がどれだけ知り合えているか

- ・子どもどうしが知り合うための活動や声かけに配慮すること
- ・「できる」「できない」の価値観ではなく、子どもの行動を肯定的にとらえて周りに広げていくこと

④「〇〇ちゃんはどうしたいかな？」と考えられる仲間のつながりを！

- ・知り合う活動を続けることで、子どもどうしが理解し合い、Aちゃんの意味を尊重する関係性をつくること

障がい児共生保育(「ともに育ち合う保育」)実践に向けて

保育者の役割は、

- ★活動を通して、子どもたちどうしが知り合う機会を豊かにすること
- ★支援を要する子と周りの子、それぞれにつけたい力を見極めること
- ★その子の困り感を理解したうえで保育をすすめること

「ともに育ち合う保育」とは、

- ★Aちゃんが今、「どうしてほしいと思っているか」、「Aちゃんが困っていないか」を理解し支えられる仲間をつくること
- ★「それでいいよ」「そのかわりすてきだよ」と子どものかかわりを認め拡げていくこと
- ★困っている友だちをほっておかない、気づいて支え合える仲間をめざすこと

「ともに育ち合う保育」は、保育者が子どもの姿から学ぶことがスタートです。「この子はどうしたいか」を出発点として保育をすすめてほしいと思います。そして、「ともに育ち合う姿」のイメージを園全体で共有しながら、「ともに育ち合う保育」をすすめてください。

参加者の感想

- 自分のクラスにいる支援を要する子のことを考える良い機会になりました。『対等』というワードにも「はっ！」とさせられました。保育者のところにくる子の思いを受けとめ、子どもたちが同じスタート地点に立てるようにしたいと思いました。一つ一つ事例をもとに丁寧に説明してもらい、とても分かりやすかったです。
- 職員間で考え、悩みながら実践していることをグループワークで話すことができ、他の方の意見も聞けて、参加してよかったと思いました。知り合う機会を大事に、周りの子も、保育士自身も偏見にとらわれず、かかわりあえる仲間にしていきたいです。
- 保育における発想の転換が大事。気づきが大事だと感じました。あらためて心にとどめておきたいと思います。否定で返すことで、支援を要する子と周りの子との距離がどんどん離れていくというお話を聞き、肯定の声かけを大切にしていきたいと思いました。
- 支援を要する子だけではなく、周りの子がどうかかわってほしいかということを考えながら保育を行いたいと思いました。保育所だけでなく、卒園してもつながり続ける関係をつくっていききたいと思います。

本講座は、2016年度 人権保育推進支援事業(三重県委託事業)プロジェクト会議作成のリーフレット『「ともに育ち合う保育」～障がい児共生保育の視点から考える～』の内容とリンクしています。リーフレットは三重県人教HPに掲載していますので、是非あわせてお読みいただき、研修等でご活用ください！